

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第36回 「107年ぶりの優勝」に思う

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

皆さまには既に^{きゅうどん}旧聞に属するかもしれませんが、猛暑に見舞われた8月に兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で繰り広げられた第105回全国高等学校野球選手権記念大会で、筆者の母校が107年ぶり2回目の優勝に輝きました。年に1度の開催で105回の歴史の中で107年ぶりというのは計算が合わないように思われると思いますが、先の大戦中や新型コロナウイルス感染拡大の最中など、何回かの大会中止があったためです。筆者は今大会期間中、3回に亘り甲子園に駆け付け、応援をしました。トーナメント戦で、1回負ければチームは大会を去らなければならないので、初めは「負けるまでに1回、応援したい」との思いで行きましたが、まさか、一生に1度あるかないかの好機に立ち合えるとは思いませんでした。この大会を通じて、様々なことに遭遇し、日本社会の歪みや学生スポーツの在り方などについて考えさせられましたので、いくつか紹介したいと思います。

主催者の日本高等学校野球連盟や新聞社が「107年ぶり」を^{けんてん}喧伝するので、筆者もそれで通していますが、107年前の大会は「第2回全国中等学校野球選手権大会」であり、その当時の我が母校は5年制の旧制中学校でした。そして、その当時の校名は、現在、新制の3年制中学校である系列校が引き継いでいます。ですから、正確に言えば第2回大会と現在の高等学校は別の組織ですので、「初優勝」ということもできると思っています。しかし、107年前も今も同じ大学の系列校であり、同じ塾旗（校旗）を掲げるので、「同じ学校」だと認識して頂いたのかもしれませんが、まあ、^{けう}稀有なことですので、敢えて反論はしないことにしています。

8月23日に行われた決勝戦では、母校の選手が打ち上げたフライを、相手校の2人の野手がぶつかって捕り損ないました。それを捕っていればスリーアウトチェンジで、その時点で母校には点が入りませんでした。しかし、ボールを落としたことにより、走者が生還し、さらに安打が続いてこの回、大量得点し、勝敗の行方が見えてくることになりました。このことについて、SNSでは、「優勝校の応援が激しすぎて、野手の失策を誘った。プレーを^{きまた}妨げる応援はいかかなものか」という批判的な書き込みが多数見られました。

しかし、そういう批判をする人たちは、コロナ禍の中、無観客で行われた東京オリンピック・パラリンピックやその後も続いた大相撲、プロ野球、Jリーグなどの声出し応援禁止での開催がベストだということでしょうか。選手の立場から言えば、まさにその正反対だと思います。スポーツ選手は、自らに対する応援から力をもらい、相手に対する盛大な応援に、「なにくそ！」と奮起するものです。筆者自身、子供の頃から現在に至るまで柔道に取り組んでおり、その感覚は身体にしみついています。また、甲子園大会と前後して行われた男子バスケットボールや女子サッカーのワール

ドカップでの日本チーム応援では、国民のものすごい歓声上がり、試合場も大音響に包まれましたが、このことについての批判は聞いたことがありません。

とはいえ、問題のフライが上がった時、野手の1人が、もう1人に対し「(自分が捕るから) 退け！」と叫んだものの、その声が応援の声援にかき消されて聞こえなかったのは事実のようです。このことについて、敗者側の監督や選手は「(優勝校とは) 今年春のセンバツ高校野球大会でも当たっており、大音響の応援が行われることは織り込み済みだ。野手の連携や風向きの計算が十分にできなかったことが失策につながった」としています。「相手の失策に対する声援は無礼だ」との意見もありましたが、打者が打った事への歓声と、走者が本塁突入して得点が入った事への歓喜もいけないのでしょうか。一連のプレーに対する声援であり、切り取って区別することはかなり困難なことだと思います。

母校の系列大学は東京六大学野球リーグ戦に参加しています。日本のスポーツ応援はこのリーグ戦がリードしてきました。そこで行われる応援は他の高校にはない効果的な方法がとられているのは事実です。筆者の友人の応援指導部卒業生は「大学リーグ戦の応援方法をそのまま甲子園に持ち込んだのは申し訳なかった」とは言っていました。全国の高校がこの応援方法を参考になっているのは広く知られています。決勝戦の試合中、相手校が守備のタイムを取ると、応援の声は止まり、球場全体が静寂に包まれ、守備側の打ち合わせの邪魔をしなかったのは見事でした。

ところで、筆者は3回応援に行き、どの日も大変な暑さに見舞われました。「夏の甲子園で暑いのは当たり前だ」という声もありますが、『毎日新聞(電子版)』9月1日の報道によると、気象庁は同日、「今夏(6~8月)の全国の平均気温が1898年の統計開始以来最高だった。平年より1.76度高く、過去最高だった2010年度の平年比プラス1.08度を大きく上回った。東日本は同プラス1.7度、(甲子園がある)西日本は同プラス0.9度だった」と発表したそうです。アルプススタンドで応援していても、全身汗びっしょりになり、大いに日焼けしました。

筆者が応援したのは4試合設定の日は第3試合と第2試合、決勝戦は昼過ぎのプレーボールでしたから、いずれも昼間の暑い盛りでした。大会要領では、4試合設定の日は午前8時から第1試合を行うことになっています。8時からの第1試合と、夕方午後4時以降に始まる第4試合は比較的涼しいものの、第2、第3試合は炎天下の試合になります。選手や審判の健康維持のため、今大会から5回裏終了後に10分間のクーリングタイムが設けられていましたが、思い切って真昼間の第2、第3試合は午前8時以前の早朝とか、日没後のナイター時間帯に移動し、昼の酷暑の時間は試合をしないくらいの英断が必要ではないでしょうか。或いは、暑い時間の試合に限り、冷暖房可能なドーム球場を使う手もあると思います。大会では脱水症状で野手の脚などが攣ることが多くありました。地区予選にあたる神奈川県大会では、主審が体調不良で交代したこともあり、こうした現実を踏まえた決断の時だと思います。

また、今大会は球場外の大雨にも見舞われました。これは大会主催者には直接関係ありませんが、東京-関西を結ぶ東海道新幹線が大会期間中の16日には、静岡県内の大雨の影響で運転がストッ

プし、高速道路も大幅規制されました。朝早く東日本を出発した応援団は甲子園にたどり着いたものの、多くの人たちは途中で足止めされ、試合時間に間に合わない学校もありました。

筆者自身は逆に、母校の試合終了を見届けて午後4時頃新大阪駅に向かったところ、午後1時台の東京行新幹線列車がまだ出発していませんでした。その後もダイヤが混乱し、指定券は何の役にも立ちません。何とか自由席に潜り込み、深夜になる前に東京の自宅に帰宅しましたが、全く座れなかった人がいたほか、東京着が翌日未明以降になった友人も多数いました。また、翌日もダイヤが混乱して甲子園に行けなかった話も聞きました。

この新幹線の混乱は天災だという人もいますが、人災の面も大きかったのではないのでしょうか。天気がよくても、民族の大移動が起こるお盆にあたる8月中旬は、ただでさえ新幹線の乗客が多い時期です。それに加え、東日本の学校が甲子園で勝ち進めば応援のため、新幹線や高速道路で関西を目指す人の数が異常に増える時期です。東海道山陽新幹線を運行するJR東海、JR西日本の分析で、今回の雨による混乱をめぐり様々なミスが指摘されていますが、天候を把握しての事前の広報、非常時の運転計画の作成が重要なのは言うまでもありません。新大阪駅が列車に乗れない多くの乗客で膨れ上がった今回は、そうした点に多くのミスが重なったようです。そうした反省に立って、混乱を最小限に抑えてもらいたいものです。

大会が終わり、静かに振り返って考えてみたとき、「過去105回に亘り、やってきた大会は日々変化し、成長してきたはずだ」という高校野球に対する思いがこみ上げてきました。地球温暖化をはじめ、社会情勢の変化もここ数年、スピードが速まっています。それに対する対応は速く適切に行わなければいけません。それに加え、3年余り続いたコロナ禍は、社会の分断、歴史の継続の中断を巻き起こしました。3年で全生徒が入れ替わる高等学校や4年で学生が代わる大学などでは、伝統の継承がかなり難しくなっています。

野球応援に限らず、様々な活動で、入学以来、全く経験のない生徒や学生がトップに立ち、催し物や試合に立ち向かわなければなりません。そのうえ、その間に社会全体の変化が起きています。その中でいかに伝統を継続し、時代に合った新しいものを生み出していくのでしょうか。周りの人たちとのコミュニケーションギャップも乗り越えなければなりません。卒業や進級がない一般社会でも、経験が積み上げられていない人たちがいかに立ち向かっていくのでしょうか。

ようやく朝晩は秋らしい風が吹く日が多くなってきました。ウクライナへのロシアの侵略、極東・インド太平洋地域の緊張状態の高まり、東京電力福島第一原子力発電所からの処理水放出をめぐる風評被害、9月13日に発足した第2次岸田再改造内閣の支持率の行方と近づく衆議院解散など、日本国民にとって、未曾有^{みぞう}の試練は続きます。涼しい季節を迎え、「変えてはいけないものは護り、改革すべきは思い切って変える」という基本に立ち返って静かに考えてみる時だと思います。